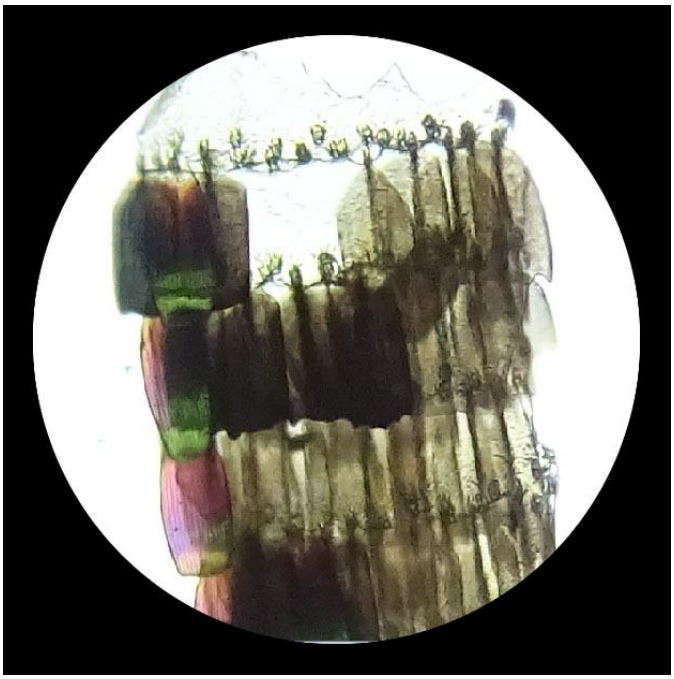
「日々の理科」（第 1668 号） 2019（H31),-2,-1

「ミドリシジミの標本（４）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

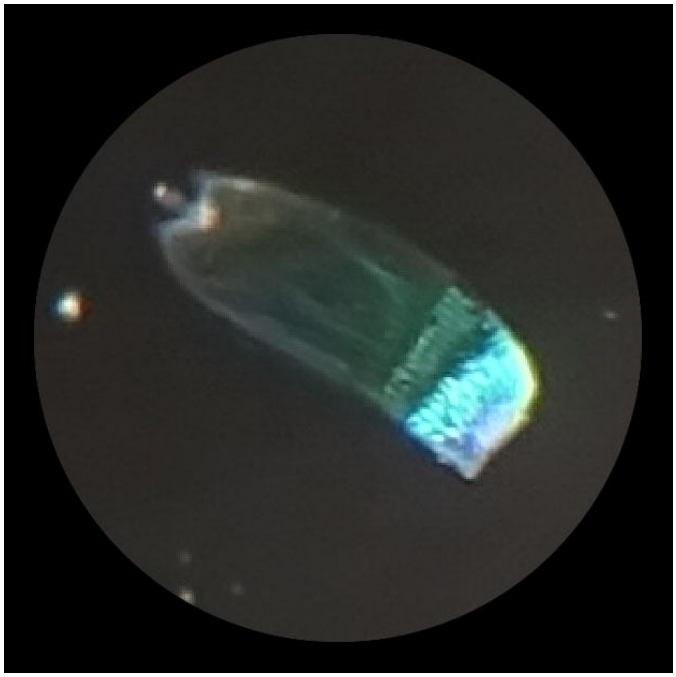
田中　千尋　Chihiro Tanaka



もう一つの翅の小片は面白い。横糸のようなものに、「ソケット」のようなものが付いていて、そこに鱗片が一つずつ付いている。まるで、クリスマスツリーに飾る電球のようだ。

ミドリシジミの鱗片を、顕微鏡透過光で観察すると、面白いことに、緑色には見えず、薄紫～桃色に見える。中には光をあまり通さない、不透明な鱗片も見られた。何か役割がちがうのだろうか？

今度は透過光ではなく、反射光で観察してみた。すると、薄紫色や桃色だった鱗片が、緑色に輝きだした。明らかに反射して光っているのだが、まるで自発的に発光しているように見える。



緑色に光る鱗粉には、縦縞模様の微細な構造が見られる。特に末端（尾）の部分がよく光を反射し、緑色の可視光を発するようだ。鱗粉自体は動物ではないのだが、まるで生きたホタルのように見える。自然は、一体何のために、こんなに美しい造形を創りあげたのだろうか？

※早稲田大学の露木和男先生の鑑定で、掲載したチョウは、本家「ミドリシジミ」*Neozephyrus japonicus* とわかりました。ありがとうございました。